

総合型選抜入学試験

2027年度は総合型選抜入学試験〈多面評価型〉として実施

〈出典一覧〉

心 理	警察庁組織犯罪対策第二課 生活安全企画課	令和 7 年上半期における特殊詐欺及び S N S 型投資・ロマンス詐欺の認知・検挙状況等について（暫定値）広報資料 https://www.npa.go.jp/publications/statistics/sousa/sagi.html
ビジネス	日本経済新聞	社説「子育ての希望かなえる環境を」（2025 年 5 月 5 日朝刊）
ビジネス	日本経済新聞	「女性就労もう一つの M 字」（2022 年 1 月 16 日朝刊）一部改変
日 文	樋口和憲	『笑いの日本文化「烏滸の者」はどこへ消えたのか?』東海教育研究所
歴 文	佐藤正幸	『世界史における時間』山川出版社
初 教	文部科学省	令和 6 年度全国学力・学習状況調査
安 全	農林水産省	食育に関する意識調査報告書（令和 7 年 3 月）
会 フ	日本経済新聞	「女性起業家への壁を取り払え」（2025 年 4 月 14 日朝刊）

問題 次の文章を読んであとの問に答えなさい。

「陽」と「陰」の真剣な笑い

大阪府東大阪市の枚岡神社は、奈良時代に春日大社への分霊(勸請)がなされ、神の分身を春日へ移して祭ったので、「元春日」という別称もある伝統のある神社です。奈良に都が定まる以前の古いヤマト王権時代には、その中心が奈良の三輪山から大阪にかけてあったとすると、その中心近くに位置する重要な神社だったのかもしれない。

その枚岡神社では、冬至の日に「注連縄掛神事」という笑い神事が行われます。これは、新しく作った注連縄を、冬至の日に古い注連縄と掛け替えるのに合わせて行われるもので、新しく掛け替えられた注連縄の前で、官司の「アツハツハツア」という笑いに先導されて、一同が「アツハツハツア」と三度笑います。

冬至は一年のうちで最も昼が短く、夜が長い日です。翌日からまた太陽の出る昼が長くなります。古代の人々は「笑い」によって太陽の復活を願ひ、それは「天の石屋戸開き」の古事記神話にも表れていると前述しましたが、この「注連縄掛神事」は古事記神話そのものにつながっています。枚岡神社に祀られるアモノコヤネ(天児屋命)は、アマテラスの隠れた天の石屋戸の前で鹿骨を焼く占いを行い、祝詞を奏上し、天の石屋戸が開いたときに鏡をアマテラスに見せた神様です。「注連縄掛神事」は、じつは古代の太陽神に捧げる「笑い」を、注連縄を通して伝える神事なのです。

一方、山口県防府市の小俣八幡宮では、毎年旧暦十二月一日に、「笑い講」というものが行われてきました。防府市のある防府平野は、山口県の中南部、瀬戸内海に面した県内最大の穀倉地帯ですが、この「笑い講」には稲作との深い関係が見られます。始まりは鎌倉時代の一九九九年とされ、農業の神である「大蔵神」を迎えて、その年の収穫を感謝し、来年の豊作を祈願するという神事です。

「笑い講」は、現在も毎年十二月の第一日曜日にちを設定して行われています。講というのは、村落共同体の古い組織の名残です。収穫への感謝と来年の豊作を祈願する神事として始まったのですが、古いしきたりはいまも変わらずに残っています。

この「笑い講」では、神官が「笑い神事」を宣言すると、神前に供えてある大樽二本を、対座する講のメンバー二人に渡します。二人は大声で「あははは」と三度笑います。その笑いの第一声は今年の豊作を喜び感謝するため、第二声は来年の豊作を祈願するため、第三声は今年の苦しみや悲しみを忘れるために発するものとされています。そしてこのとき、笑い声が小さかったり、不真面目であったりすると、講の長老は何度でもやり直しをさせるとしています。

神の前の儀礼の笑いは、このように真剣に営まれ、豊作や共同体の平安を祈願するのですが、祭りの日に大笑いすることで稲穂の生命力が増し、豊作になるという信仰自体は、地方の農村にはいまでも色濃く残っています。

さて、ここまでで紹介した二つの例は、いずれも太陽神信仰とも関係する昼間、あるいは朝の神事でしたが、次に紹介する名古屋の熱田神社の「酔笑人神事」は、夜の神事で、笑い神事としては少し異質なものを含んでいるといわれています。

旧暦の五月四日に行われるこの「酔笑人神事」は、御神体の草薙神社が熱田神社に還った故事をいまに伝える神事です。

草薙神社は、スサノオが八岐大蛇を退治したときにその尾から出てきた剣で、スサノオはそれをアマテラスに献上していますが、このスサノオにつながる儀式だという点が他との違いを生んでいるのかもしれない。

神事(儀式)自体は、夜の暗闇の中を神主が草薙神社を笑いながら移動させるというものですが、文化人類学者の山口昌男氏は、この儀式について、「笑いを通じて、得体の知れない恐怖とか、暗闇というものを征服しようとする人間の最初の行為みたいなものが儀礼として残された」(「笑いについて」『笑い』と逸脱)のだと指摘しています。

熱田神社の説明によれば、その夜、境内の灯はすべて消され、影向間社と神楽殿前、別宮前、清雪門前の四カ所で、神職たちが喜びを込めて笑うといいます。そのむかし、天智天皇の時代に神剣は一時皇居に留まっていたが、天武天皇の朱鳥元年(六八六年)の勅命によって熱田神社に戻ってきた。このとき、皆がこぞって喜んださまをいまに伝えるものだということです。

神職たちの喜び笑う様子から「オホホ祭り」とも呼ばれるように、これは太陽神に捧げる笑いとは異なります。何かを秘めた夜の闇の笑いなのです。この神事では境内の灯りが消されるだけでなく、祝詞も神饌もありません。神職たちは、古くから「見てはならない」と語り伝える神面を装束の袖に隠し持ち、その神面を中啓という扇で軽く叩いたのち、全員が一斉に「オホホ」と笑うのです。

この「オホホ」の笑いは、太陽神に捧げる「ハハハ」が「陽」の笑いとするならば、夜の月神に捧げる「陰」の笑いだということ

ができるのかもしれませんが。

(樋口和憲 『笑いの日本文化 「鳥譚の者」はどこへ消えたのか?」 東海教育研究所 二〇一三年)

問(一) 筆者は夜の神事に対して傍線の「笑い神事としては少し異質なものを含んでいる」と言っています。これはどのような理由からですか。

- (一) あなたの日常生活の中の「笑い」を二つ以上に分類し、なぜそのように分けたのか理由を説明しなさい。
- (二) (一)と(二)を合わせて八〇〇字以内で述べなさい。

1

人間文化学部 日本語日本文学科 小論文：800字／60分

2

人間文化学部 日本語日本文学科 小論文：800字／60分

次の文章は、佐藤正幸『世界史における時間』（山川出版社、二〇〇九年、一部改変した）の一節である。本文を二〇〇字程度で要約しなさい。そして、本文の内容をふまえ、世界各地における暦について、一つの国を例としてあげて五〇〇字程度で説明しなさい。なお、全体の解答は八〇〇字以内とすること。

じつは、もともと古代ローマ時代のユリウス暦では年初は固定されていたのだが、その後キリスト紀年が広まるとともに変化してきたのである。つまりキリスト紀年の普及後に、一年のはじめが一月一日ではなくなり、キリスト教徒にとって重要な日が年初（歳首）に選ばれるようになったのである。

それまでヨーロッパ諸国では、一年の始まりはキリストが生まれたとされる十二月二十五日とか、受胎告知のあった三月二十五日、あるいはキリストが十字架にかけられたあと復活したとされるイースター（復活祭）の日であった。

もし、一年のはじめが復活祭であったとしたら、キリスト紀年は非キリスト教圏に広まることは難しかったに違いない。なぜなら復活祭は、春分を過ぎたあとにくる最初の満月のあとの日曜日と決められ、三月二十二日から四月二十五日までのあいだの日を移動する祝日である。これはキリスト教世界では最大の祝祭日であるが、これでは一年の始まりが固定できない。これを放棄しないかぎり、キリスト紀年はその普遍性を獲得できなかったであろう。

そしてキリスト紀年はみごとに変身をとげ、一年のはじめを固定した。これらの年初にかわって、かつては古代ローマで新年とされたヤヌス月（英語でいえば、ジャニuary）の一日が、一年の始まりとして採用されたのは十六世紀後半以後のことである。この年初の採用時期は国によって異なり、イギリスでは一七五二年になってようやく採用された。

年初は歴史上、世界各地においても決して固定されたものとはいえなかった。すでにみたように、中国では、一年のはじめは春節として祝われるが、この年初は雨水（二月十九日）の直前の朔日（新月の日）と定義されていて、現行のグレゴリオ暦では一月二十一日から二月十九日までを動く移動祝日である。現在の中国はグレゴリオ暦の一月一日を元旦とし、旧暦の一月一日を春節として祝う。これがヨーロッパから伝わってきた新しい年初への中国流対処法であった。

一方、日本では旧暦の新年の祝賀をそっくりそのままグレゴリオ暦の一月一日に移すことで、グレゴリオ暦に対処した。この新しい年初が日本文化のなかに落ち着くのに一〇〇年を要したといえることができる。ちなみに、日本で現在採用されているキリスト紀年による一月一日は一八七三年一月一日から始まった。これを明治改暦という。旧暦の明治五年十二月三日をもって明治六（一八七三年）一月一日とすることで、世界の多くの国の年初にあわせたのである。

これは、太陰暦を廃止して太陽暦を導入するという形式をとった。この改暦を断行したのは当時参議を務めていた大隈重信である。『大隈伯爵日記』によると、当時の明治政府は財政状況が困窮を極めていた。旧暦のままでは明治六年は閏月のため一年が十三カ月となる。当時すでに月給制を導入していた役人への給料支払いを一回多くしなければならない。ところが欧米諸国が採用しているグレゴリオ暦を導入すると明治五年の十二月三日が明治六年の一月一日となる。十二月は二日間だけなので十二分の給料は支払わないことにし、グレゴリオ暦には閏月が存在しないため明治六年の月給支払いは二回で済むので政府としては財政の節約ができると考えたようである。

【中略】

日本では、明治初年段階では基督教紀元、西洋紀元、紀元等々さまざまな表記がおこなわれていたがその後淘汰され、明治十（一八七七）年以降は西洋紀元、西紀、紀元といった表現だけが使われるようになった。

その後太陽暦に西暦という訳語があてはめられて使われはじめると、これが紀年をも包摂する用語として使用されはじめ、それ以来現在までキリスト紀年をあらわすのに西暦という呼称が使われつづけている。

本来なら西暦と訳すのに適切なのはグレゴリオ暦のはずである。ところが、明治五（一八七二）年十一月九日から日本で使用が開始されたこの暦は、太陽暦という表現を使うことで、やはり宗教的色彩を取り除いて導入されている。宗教的意味合いを消し去ることは、他の文化を受容するさいにいつも重要なこととなる。結果としていえることだが、当時文化の進んでいたヨーロッパで使われている年暦を西暦と命名して使用しはじめたことは、近代化という名の西洋化を急ぐ日本人の気持ちをよくする表記であったといえる。

日本では大化という年号が六四五年に使用されて以来、今日まで年号と干支による紀年法が用いられている。また中国においては、漢の武帝が紀元前一四四年に年号を使用して以来、一九一一年の辛亥革命まで年号と干支による紀年法が用いられてきた。したがって、歴史を学ぶ者にとっては中国と日本の年号と干支の一覧表は机上の必携書として必要欠くべからざるものであった。その年号一覧にキリスト紀年を共時化させた最初の年表は、清宮秀堅の『新撰年表』のようである。そこでは上段に干支を書き、同一欄に日本の年号、中国の年号、西暦を標記し、それぞれに重要な事件を記している。

明治にはいると西洋史や東洋史、また万国史と呼ばれる歴史書が多く出版された。東洋史の領域では、明治二十八（一八九五）年出版の市村瓚次郎『支那史要』は中国年号に続けて紀元を括弧書きでいれているので、すでにこのころには歴史を世界的視野でみる視点は誕生しているのだが、多くの中国史にかんする著作は中国年号だけが主である。なぜなら当時の多くの中国史にかんする著作は皇帝年代記の体裁をとっているもので、もっぱら年号が使われている。しかしなかには明治四十三（一九一〇）年に出版された武藤虎太『東洋史提綱』のように、西暦をルビのようにあつてある書物も出版されている。西洋史の教科書にかんしては、明治五（一八七二）年の吉田賢輔編『近世史談』以来、西暦（西洋紀元、紀元）という表現が多いが使われている。

日本史にかんしては明治六（一八七三）年出版の清原道彦『国史訓蒙』のように、頭注に西洋紀年を挿入しているものもあるが、多くは年号をもっぱら使用している。日本史教科書は年号を主としてそのあとに括弧書きで西暦をいれてきた。

考えてみると不思議なのは、現在われわれは西暦という表現を使いながら同時に、紀元前・紀元後という表現も使っている。微妙なずれではあるけれども、現在でも紀年と暦を明確に分けることの難しさを示している。

1

人間文化学部 歴史文化学科 小論文：800字／60分

2

人間文化学部 歴史文化学科 小論文：800字／60分